2025/1/12

ルカの福音書　講解メッセージ㊴

『ルカの福音書 16 章 14-31 節　ラザロと金持ちの譬え』

■自分で自分を高くしない

> 「さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間で高くされるものは、神の前では憎まれ嫌われます。」（ルカ 16:14-15）

イエス様はパリサイ人たちに「あなたがたは人の前で自分を正しいとする者だ」と言われました。それは、「自分で自分を高くする」ということです。

私たちにも、人前で少しでも自分をよく見せようとするなど、自分で自分を高くする心があるものです。パリサイ人はその象徴であり、私たちの姿です。

彼らはお金が大好きでした。お金があると安心だからです。ですから、少しでも多くお金を得るために、評判を良くし、尊敬されようと頑張ります。しかしイエス様は「人間の間で高くされるものは、神の前では憎まれ嫌われる」と語られました。どういう意味でしょうか。

神と人との接点は、私たちの弱さにあります。神は愛であり、愛は不足を補います。つまり、自分には不足がない、弱さがないと言うなら、神との接点はありません。感情的に言えば、苦しみがなく、楽しいことばかりだと言うなら、神との交わりは生まれません。聖書の言葉で言えば、自分には罪がないと言うなら、神との接点はないのです。

自分の不足、すなわち、弱さや苦しみを神の前に祈り、助けを求めることが、「自分を低くする」ということです。自分を低くする者を神は高くしてくださいます。

しかしパリサイ人は、自分は立派であり、罪はない、つまり、不足はないと言いました。イエス様はそのことを「神の前では憎まれ嫌われている」と語られたのです。神様が交わろうとしても、接点がないからです。

そしてイエス様は次のように語られました。

「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これに入ろうとしています。」（ルカ 16:16）

唐突に聞こえるかもしれませんが、これは今の話とつながっています。

「律法と預言者はヨハネまでです」とは、神の国に入るための律法の教えと、それを伝える預言者の働きは、バプテスマのヨハネまででいったん区切られ、それ以降は神の国の福音が宣べ伝えられる時代になったということです。イエス様が宣教を始められたとき、「神の国は来た」と語られました。約束されていた神の国が、イエス様とともに来たのです。

この神の国に「誰も彼もが“無理にでも”入ろうとしている」とは、神の国は福音によって入るものであるのに、律法の行いによって入ろうとしているという意味です。パリサイ人は「私は週に二度断食し、献金も捧げ、律法を守っています。私はあの罪人のような者ではありません」と祈りました（ルカ 18 章）。律法を守ることによって、自分を正しい者とし、天国に入ろうとしているのです。しかし、それは間違っていると、イエス様は教えておられます。では、律法は不要になったのかというと、そうではありません。

「しかし、律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしいのです。誰でも妻を離別して他の女と結婚する者は、姦淫を犯す者であり、また夫から離別された女と結婚する者も、姦淫を犯す者です。」（ルカ 16:17-18）

イエス様は、律法は決して滅びないと言われました。律法は、人の罪を指摘します。律法は不要になるのではなく、神が与えられた目的を持ち続けるのです。

■律法は何のためにあるのか

「では、律法とは何でしょうか。それは、約束をお受けになった子孫が来られる時まで、違反を示すために付け加えられたもので、御使いたちを通して、仲介者の手で定められたのです。」（ガラテヤ 3:19）

律法がなければ、何が罪であるか分かりません。律法は、天国に入るためにあるのではなく、違反を示すためにあるのです。では、なぜ違反を示す必要があるのでしょ

うか。

> 「しかし、聖書は、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは、約束がイエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」（ガラテヤ 3:22）

ここでは「聖書」と訳されていますが、文脈上「律法」と置き換えて読むことができます。律法は徹底的に人の罪を指摘します。律法の規定を一つでも破れば、すべてを破ったのと同じ……つまり、100 点か 0 点しかありません。たった一度の嘘でも、律法を犯したことに変わりなく、誰もが 0 点になってしまいます。

そのため、律法はすべての人を罪の下に閉じ込めたと語られています。律法を見つめれば見つめるほど、私たちは自分の弱さ、罪、限界を知り、絶望に追い込まれます。

この絶望が必要なのです。それは、絶望することで初めて神の前にへりくだることができるからです。

「私は立派に生きてきたのだから天国に行けますよね」という考えは間違いです。律法を正しく見つめるなら、誰もが神の前に頭を下げるしかなく、「神よ、私をあわれんでください」と祈るしかなくなります。

神は律法を通して「あなたは罪人でしょう。罪を認めなさい。」と呼びかけ、私たちを絶望に追い込み、へりくだって神に助けを乞うことを待っておられます。神にあわれみを求めること、それが信仰です。その信仰によって、人は救われるのです。

> 「信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰を得るためでした。こうして、律法は私たちをキリストへ導くための養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためです。」（ガラテヤ 3:23-24）

律法の下で生きるとは、絶望の中に置かれることです。しかし、それは信仰へ導くためでした。

私たちが救われるのは、神の呼びかけに応答するからです。応答することを信仰と言います。そのためには、神の前にへりくだる必要があります。へりくだることができるのは、律法のおかげです。律法が養育係として働き、私たちをキリストへ導いたのです。

しかしパリサイ人は、自分が正しい人間であることを証明するために、律法を使い

ました。これでは救われません。律法は、自分が罪人であることを自覚するためにあります。自分の限界に気づき、神に助けを乞うところから、神との関係が始まるのです。神は愛であり、愛は不足を補います。律法はその不足を気づかせ、神のもとへ導くために与えられているのです。

■金持ちとラザロのたとえ

イエス様は、律法の行いで無理にでも神の国に入ろうとするパリサイ人に対して、たとえを話されました。

「ある金持ちがいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。ところが、その門前にラザロという、全身おできの貧しい人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちるもので腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のでき物をなめていた。さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムの懐に連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。その金持ちはハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが遥か彼方に見えた。しかもその懐にラザロが見えた。」（ルカ 16:19-23）

この金持ちは、パリサイ人を象徴しています。人から「すごい」と言われるように振る舞い、贅沢に暮らすことで、自分を高くしている人を表しています。それに対してラザロは、人から見向きもされず、仲間外れにされている人です。金持ちとは対照的に、自分を低くする者を象徴しています。

地上では金持ちは高くされ、ラザロは低くされていました。しかし、死んでみると逆転しています。金持ちはハデスで苦しみ、ラザロはアブラハムの懐に迎えられています。自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるということです。

私たちの人生も同じです。死んだとき、どんな生き方をしてきたのかが明らかになります。自分を高くしようとする人生を生きた人は、最後に低くされます。自分を低くする人生を生きた人は、最後に高くされます。

「彼は叫んで言った。『父アブラハムよ、私をあわれんでください。ラザロが指先に水を浸して、私の舌を冷やすようにしてください。私はこの炎の中で苦しくてたまりません。』 アブラハムは言った。『思い出してみなさい。お前は生きている間に良いものを受け、ラザロは生きている間に悪いものを受けていました。しかし今ここで、彼は慰められ、お前は苦しみもだえているの

です。』」（ルカ 16:24-25）

金持ちは人生の時間を、自分を飾り、人から賞賛されるために使いました。良い服、良い暮らし、褒められる関係――しかし、その時間を神との関係を築くためには使いませんでした。彼が手にしたものは、人の評価という消えてしまうものだけでした。

一方、ラザロはこの地上で何も持たず、人からも顧みられませんでした。しかし、孤独の中で神に向き合うしかなかった彼は、神への信仰・希望・愛を育て、天に宝を蓄えていました。人から何も得られなくても、神との関係が彼を豊かにしたのです。

イエス様は「不正の富で友をつくりなさい」（ルカ 16:9）と言われました。不正の富とは、消えてしまうこの世の時間のことです。神は永遠であり、消えるものは神の前では正しいものとはされません。だからこそ、その時間を神との関係を築くために使いなさいと教えているのです。人の賞賛のために使えば消えますが、神との関係のために使えば永遠に残ります。

ペテロは、イエス様に「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と叱責されました。私たちは、心を人ではなく神に向ける必要があります。

> 「誰も、すでに据えられている土台のほかに、他のものを据えることはできません。その土台とはイエス・キリストです。 もし誰かがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらで建てるなら、各人の働きは明らかになります。その日はそれを明らかにするのです。 それは火によって啓示され、その火は各人の働きがどのようなものかを試すからです。 もし誰かの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。 もし誰かの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は火の中をくぐるようにして助かります。」
>
> （Ⅰコリント 3:11-15）

私たちの土台はイエス・キリストです。問題は、その上に何を建てるかです。人の評価という“わら”を積み上げるのか、イエスとの関係から生まれる信仰・希望・愛という“宝石”を積み上げるのか。火が試すとき、残るのは後者だけです。

私たちがこの世界で苦しみや恐れを覚えるのは、環境や人のせいではなく、神との関係が揺らいでいるからです。神との関係が中心にあり、その中心がこの世界に投影されます。世界があって私があるのではありません。神との関係があって私があり、神が私を支えてくださるから私は生きています。中心が神であるとき、世界の景色は正しく見えます。中心が人になるとき、すべてがゆがみます。

「こういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」（Ⅰコリント 13:13）

神との関係によって手にする信仰・希望・愛だけが、永遠に残ります。土台であるイエス・キリストと結びつくものだけが残ります。

神はあなたに、「あなたはどちらの人生を選びたいのか。」と、問いかけておられます。消えるもののために生きるのか。 永遠に残るもののために生きるのか。私たちは今、その決断を求められています。

■小さいことに忠実に生きる

「『それればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』彼は言った。『父よ。ではお願いです。ラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者があります。その言うことを聞くべきです。』彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」（ルカ 16:26-31）

金持ちは死後、「助けてくれ」と叫びました。しかし、肉体の死とともにすべてが明らかになり、その結果を変えることはできません。越えられない淵があるとは、死後に選び直すことはできないということです。どんな人生を生きるのかは、今決まります。イエス様はその決定の重さを語っておられます。

ここで言われる「モーセと預言者の教え」とは、神の律法です。ローマ書には「神の律法は人の心に書き込まれている」とあります。つまり、神の声はすでに私たちの心に届いています。私たちの中心には神と私しかおらず、神の前に立つとき、周りには誰もいません。その中心で、神は律法を通して語り、私たちの弱さと不足を示され

ます。私たちを絶望に追い込み、へりくだらせるためです。

神の律法に応答しないなら、誰が何を語っても聞きません。人が人を救うのではなく、救うのは神です。神の呼びかけに応答しないなら、たとえ死人が生き返って語っても、人は心を開きません。イエス様の例えは、この深い真理を示しています。

その最大の不足とは、肉体の死です。死んだらどうなるのか。

この不足を認めるなら、神に助けを求めるしかありません。そして神は言われます。「あなたが助けを求めるなら、私はあなたを助ける」。これが救いです。

その救いを成し遂げるために、神は十字架に架かられました。私たちの不足を補い、十字架で死に、復活して見せてくださいました。「あなたも復活する」と示すためです。ここに希望があります。

皆さんはイエス・キリストを信じ、洗礼を受けました。であれば、人生の第一は神との関係を築くことです。

では、神との関係を築くために何をしたらよいのでしょうか。 イエス様はこう言われました。

「小さいことに忠実な人は、大きいことにも忠実です。」（ルカ 16:10）

イエス様が語られた「小さいこと」とは、私たちが日々の中で神との関係を築くためにできる、ほんのわずかな実践のことです。最も小さいことは、礼拝を守ることです。１週間 168 時間のうち、神にささげるのはわずか２時間です。しかし私たちは、この小さなことにさえ言い訳をしてしまいます。ですから、まず礼拝を大切にすること、ここからすべてが始まります。

次に、十分の一の献げ物です。十分の九はあなたが自由に使ってよいのです。十分の一を神に返すことは、大きな負担ではありません。これも小さなことです。

さらに、感謝の祈りがあります。食事の前の一言、一日の終わりの一言、「神様、感謝します。」この短い祈りが、心を神に向ける小さな一歩になります。24 時間のうち、ほんの数秒です。これも小さなことです。

こうした小さなことを積み重ねると、心が神に向きます。神との関係が深まり、自分の弱さや不足に気づかされます。そして「こんな私でも神は愛してくださる」と知るとき、信仰・希望・愛が満ちあふれます。イエス様は「多くの罪が許された者は、多く愛するようになる」と語られました。神は私たちの弱さを指摘し、それを補うことで関係を築いてくださいます。これが天に宝を蓄えるということです。

ラザロは人から無視され、仲間外れにされました。しかし、それは彼にとって幸い

でした。人との関係を築けなかったからこそ、神との関係に集中できたからです。人から褒められたり称賛されたりすると、イエス様は「災いだ」と言われました。なぜなら、人の評価は誘惑となり、神から心をそらしてしまうからです。

大切なのは、いつまでも残る神との関係を築くことです。

聖書は単なる説教ではなく、あなたが納得することを求めるものでもありません。聖書の言葉は、神が差し出しておられる招待状です。その招待状を受け取り、神のもとに来るかどうか、神との関係を築くかどうかの決断を迫っています。神は、あなたが神を信じ、神のもとに飛び込むことを求めているのです。